

世界動物文学全集

15

ひげおじさん
神皇の長男
フワネエルサ

世界動物文学全集

15



講談社

世界動物文学全集15 ひげおじさん
神象の最期
ブワナ・エルザ

昭和55年1月18日 第1刷

著者 フィリップ・ブラウン
アブル・ファジール・シディッキ
ジョージ・アダムソン

訳者 藤原英司
岩淵達治

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話東京 (03) 945-1111 (大代表) 振替東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1500円



©藤原英司 岩淵達治 1980年
Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0397-405155-2253 (0) (文2)

目次

ひげおじさん 5

神象の最期 83

ブワナ・エルザ 95

解説・藤原英司 400

装幀 蟹江征治

イラスト 田中豊美



ひげおじさん

フィリップ・ブラウン
藤原英司訳

UNCLE WHISKERS

by

Philip Brown

Copyright © 1974 Philip Brown

Japanese language anthology rights arranged

with Andre Deutsch Ltd., London

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

プ ロ ロ ー グ

わたしは今までにネコを二、三匹飼ったことがある。だがそのネコたちについては、とくに強烈な印象や思い出があるわけではない。どんなネコでもイヌと同じように、なんらかの独自の個性をもっている。もっともその個性というのは、かならずしも快いものとはかぎらない。それになんかネコやイヌでも、かれらがじっさいにどのような生活をし、どんな個性をもっているかを理解しようと思うなら、ちょうど人間の男や女との場合と同じように、ただのつきあい以上のものが需要である。

ネコは見知らぬ人に対して親しみを示さない傾向があり、イヌはどちらかというと、見知らぬ人でも親しみを示す。だがもし初めて会ったボーダーテリアのごきげんをとりとうとする時には、こんな格言はまったく頼りにならないものだ。

わたしの妻は農夫の娘だが、たいへんなネコ好きである。妻の家では、イエネズミやノネズミをとらせるため

に、いつもネコを三、四匹飼っていた。だが、わたしは事実上、そのネコたちに何の興味も覚えなかった。

もしあなたがたの恋人がネコを飼っていれば、そのネコに関心を示すようにしたほうがいいだろう。とにかくわたしとしては、ネコを飼うのは楽しそうだねということをし、いっしょけんめい彼女に話した。じっさいわたしは、そのころネコを理解しはじめていた。ネコという動物は体の動きが優雅で、時にはじつに美しい模様のついた毛皮をつけているが、そういうこととはべつに、ほとんどのネコが独自の個性をもっていることがわかりだしていた。もっともその個性のうちには、じつに不愉快なものもあった。

その一つの例がジュディというネコだ。この雌ネコはずんぐりした、いかにもたくましい感じのオレンジ色のネコで、大小のネズミやウサギ、鳥などを捕らえては、その獲物を相手にじつに残虐な遊びをやるのだった。ジュディはまさにヤマネコに近く、家の中で暮らす時だけ、少なくとも一時的にへりくだっておとなしくなるようだった。このネコは天気が悪くて、夜、外にいる気がしない時だけ、家の中で食事をし、また家の中で寝た。ジュディにさわってみようとするものは誰もいなかった。ジュディが占領することになっている台所の椅子があって、もし誰かがそこからジュディをどかせようとすると、とたんにジュディはとび起きて、つばをとばしながらうなり、じゃまをしようとする者の手に針のような鋭い爪の一撃を見舞う。しかも手

ごろを加えることなく、爪をいっぱいにむきだしての一撃だ。

わたしが結婚した時、妻はネコを二匹つれてきた。一匹は小さくてとてもかわいく、じつにもの静かなオレンジ色の雌ネコだった。その雌ネコは、雄ネコたちのあこがれの的^めで、すでに子ネコを何匹か産んでいた。だが、どの子も飼ってみたいような子ではなかったということだった。しかし、第二次世界大戦が始まって、わたしがイギリス空軍に入隊する直前に、そのネコがショウガ色の子ネコを一匹産み、わたしたちはそれを飼うことにきめた。その子ネコがいつお腹にできたのか、わたしにはわからなかった。そしてわたしたちはそのネコをティモシーと呼ぶことにした。わたしが入隊すると、妻はわずかな家財をまとめて自分の実家へ移った。わたしが軍隊にいる間、両親といっしょに暮らすためである。休暇で家へ帰った時、わたしは一度、たいへんな失敗をしてしまった。

ティモシーは夏でも冬でも、暗くなってからよく狩りにかけた。そしてティモシーは母屋^{おや}いがいのいろいろな建物や台所の屋根など、ややこしいルートを通して、母屋の裏側に面した妻の寝室にたどりつき、その窓の外のせまい棧^{いしき}の上にとびおる。事件がおこったのは、わたしが休暇をとって、うんざりする長い旅のはてに疲れきって家へ帰った時だった。ま冬でとても寒く、地面には雪が四、五センチつもっていた。夜中の一時か二時ごろ、わたしは深い

眠りからさめた。そしてなにかが窓をたたいている音を聞いた。見ると晴れた星空を背景に、ぼんやりしたネコの姿が浮かびあがっていた。

わたしは妻を起こさないように気をつけながらベッドから出て、ねぼけまなこのまま窓を開いた。楽しい夜の散策をおえて帰ったネコを中へいれてやろうと思ったのだ。ところがわたしは、窓の外には、ごくせまい窓わくの棧^{いしき}しかないことを忘れていた。しかもその窓は外へ押して開くタイプの窓だったので、窓を押したついでにネコを外^{そと}の闇にほうりだしてしまった。しまったと思ったわたしはすごい叫びをあげ、妻は目をさました。わたしがなにをやったか話すと、妻は大急ぎで階下へかけおりにいき、わたしはいくら顔^{かほ}を赤らめながら、あとをついていった。

家の裏の戸をあけると、ティモシーはゆっくり台所へはいってきて雪をふり落とし、ボウルからミルクをなめた。体はどこも、なんともない。ネコは五、六十センチの高さ（あるいはもっと高いところ）から落ちてても平気なものだが、当時わたしはそんなわかりきったことさえ知らなかった。

戦争が終わると、わたしと妻は運よく夢にまで見たすばらしい山小屋をかりることができた。それはパークシャーとハンプシャーの境の人里離れた森の中に建っていた。

ショウガ色の雄ネコ、ティモシーはもう六歳になっていて、わたしはティモシーのことをよく知る機会がないま

ま、日がたつてしまっていた。だがティモシーは人づきあいのいいネコで、わたしたちはみんないっしょにうまくやっていった。

その山小屋は辺^{へん}びなところであり、砂利^{じり}を敷いた小道を通る車は、ごくわずかか、あるいはまったく通らないかで、ティモシーはネズミ狩りやジネズミ狩りを心ゆくまで楽しんだ。半マイルほど離れたところにべつの山小屋があって、そこにサミーという名の雄ネコがいた。ティモシーにとつて一番近くのネコ仲間^{ともな}というそのサミーだったが、ティモシーはサミーを毛嫌^{けが}いするようになった。しかし、これはおたがいさまのようだった。サミーもティモシーを嫌^{きら}っていたからだ。両方とも体は大きく強くて、よくケンカをした。おたがいには力^{ちから}は同じくらいだったので、ケンカは通常、自分の領地で戦ったほうが勝ち、侵入者のほうが引きさ^{ひき}がった。奇妙なことだが、ティモシーもサミーも、おたがいにケンカする時^{とき}いがいい、とてもおとなしかった。

六、七年たつて、わたしたちはベイシングストークの近くの村へ引^ひ越した。ティモシーもいっしょにきたが、ティモシーはもう十四歳ぐらいいなっていた。ネコの年齢を人間の年とくらべる一つの方法は、最初の一年を一歳とみて、そのあとネコは一年ごとに六歳ずつ年をとると思えばよい。おおざっぱな比較だが、だいたいそんなものである。これで計算すると、十四歳のネコは、人間の年で七十

九歳になる。ティモシーの暮らしぶりはなかなか活発だったが、十四歳になると、たしかに年を感じさせた。またわたし達の引^ひ越しによって、ティモシーがなれ親し^{おな}んできた誰にも騒^{さわ}がれない孤独な生活がなくなった。しかし、わたしたちの引^ひ越した先には大きな庭があり、その中に荒れた土地もいくらかあって、ティモシーはそこでジネズミを狩^うったり、晴れた日に昼寝^{ひるね}をしたりすることができた。十五歳の誕生日が近づいた時、ティモシーの体力^{ちから}の衰^{おとろ}えが急にひどくなった。そして獣医^{じゆうい}のすすめに従^{したが}って、わたしたちはティモシーを安楽死^{あんらくし}させた。

この時、妻はすでに灰色のネコを二匹飼^かっていた。母親ネコとその娘のネコである。両方とも美しいネコだったが個性がなかった。わたしはやってみもしなかったが、たとえ不可能ではないにしても、その二匹になにか一番簡単な命令言葉でも教えることはむずかしいという気がした。ネコはイヌと同じように知力の個体差^{こたいさ}が大きい。しかしたいいていのネコは簡単な命令の言葉を理解し、従^{したが}うものだ。ネコはもちろん、わたしたちのように言葉の意味を理解することはできない（これはイヌについても同じだ）。時どきネコを飼^かっている人が、自分のネコに対して、まるで人間に話しかけるように話しているのを見ることがあるが、これはいたましいことだ。そういう人は、自分のネコがまるで頭のいい人間のように、あらゆる言葉の意味を推しはかる能力があるかのように思っている。

だが、もし飼っているネコが布張りの椅子やソファで爪をとこうとしている時に「いい子だからそんなこととしてはだめよ」なんて言っていてやめさせようとしたってむだだ。わたしの経験からいえば、ネコがもっともす早い反応を見せるのは声の調子と、単純な命令言葉である。じっさい怒気をふくんだ「やめろ！」という言葉がききめがあるので、それを聞くとどんなネコでもとびあがるだろう。もっとも、こういう命令言葉は、しつけの初期段階でくりかえさなくてはならない。

わたしは今まで自分で飼ったネコに「ノー」という言葉をなんとかわからせるようにしてきた。ネコが、やってほしくないことをやりそうになったら、すぐに「ノー」というのだ。また食料置場やその他の禁じられた場所へネコがはいった時には「アウト！」と言う。もし、声の調子をよく操作して命令することができれば、たいていのネコは、あなたのいう言葉がなにを意味するかすぐに学ぶものだ。声の調子は言葉そのものと同じようにメッセージを伝えるものなので、おとなのネコにあなたの気持をわからせることはじつに簡単なことだ。たとえば優しい調子で話しかけてやればネコにはあなたが喜んでいことがわかるし、同時にあごの下をかいてやったり体をなでてやったりすれば、いっそうよくあなたの気持をわからせることができる。またあなたの不快な気持は、荒々しい鋭い調子でいえば、ネコをぶたなくてもわからせることができる。

ティモシーはわたしに多くの喜びを与えてくれたので、わたしはたしかにシヨウガ色のネコのファンになった。だがティモシーが死んだ時、かわりにほかのネコを飼いたいという気持はさっぱり起こらなかったから、わたしはほんとうのネコ好きではないのだろう。ティモシーがいなくなっただけで淋しかったのは事実だが、ティモシーがいなくてもけっこうそれでうまくやっていけたのも事実だ。だから、つぎにシヨウガ色のネコがわたしの家へきたのは、わたしたちがそうしようと思っただけではなく、まったくの偶然だった。

ティモシーがいなくなつて一、二年たったある十月の方だった。わたしはロンドンの事務所からもどろ、夕食にしようとしてテーブルについた。その時、妻が近所の人の話をした。それによると、小さなシヨウガ色のネコが一匹「行方不明」になったと近所の人たちが話しているということだった。なにしろ昔のことなので、その時のことがこれで正しいかどうか、ちょっと自信がないが、とにかくあたりが暗くなつてしまつてはネコを捜してやるうにもやりようがなかった。そこでわたしは食事をおえ、コーヒをのみながらパイプをふかしだした。その時、玄関のベルが鳴り、妻が応対にでいった。

玄関で話をする声はきこえたが、なにを話しているかはわからなかった。しかし聞きなれないかん高い声なので、きつと妻の知りあいの人が出て二人でなにか立ち話をして

いるのだと思った。ところがおしゅべりが、かなり長い間つづくのでわたしはいささか気になり、ようすを見にでかけた。だがお客さんはわたしの知らない人だったので、わたしは台所へはいって電気のスイッチをつけた。するとそこに小さな美しいショウガ色のネコがいた。

妻はわたしたちの夕食用にジャガイモの皮をむき、むきおわった皮を長い柄のついたナベに入れて台所のテーブルの下においてあった。すてる前にそこにおいていたのだ。ネコはそのジャガイモの皮を、まるで珍味のキャビアでも食べするようにたべていたのだ。

わたしが手をのばしてナベをとっても、そのネコはこわがらなかった。そしてよほど飢えているとみえ、急に食べ物を取りあげられたのにとまどいながら、わたしのあとをついて歩いた。わたしはそのネコをつまみあげたが、ネコはべつにわたしに敵意を示さなかった。まるで骨と皮ばかりのようなネコだった。だが毛皮の状態はよく、明らかにまだ子ネコで一歳以下と思われた。雄ネコである。

わたしたちは初めからうまが合った。そしていい食べ物を与えると、そのネコは大きな顔をして家じゅうを歩きまわり、まるで何ヵ月もそうしてきたように舐めた。わたしたちのそばにしゃがみこんだ。そんなになれたネコは初めてだったし、それほど適応力のあるネコにも会ったことがなかった。そうしてそのネコはすぐにわが家のメンバーに喜んで加えられることになった。

わたしはそのネコにベルモンテという名前をつけ、ネコ用のはしごを作った。そのはしごをわたしたちの寢室の窓にかけ、ネコが暗くなつてから帰ってきたり、朝わたしたちが寝ているうちに出ていきなくなったら出ていけるようにしてやった。

ベルモンテは八ヵ月か九ヵ月、わたしたちといっしょに暮らした。それからある夏の朝早く、ちょうど夜明けの光がさしそめたころ、わたしはベルモンテが窓わくへとびのり、ネコ用のはしごを伝って姿を消すのを見た。それっきりベルモンテは帰ってこなかった。わたしたちは自分でもずいぶん捜し、また人びとにも聞いてまわったが、ついにベルモンテの姿を見つけることができなかった。もしネコやイヌが車にひかれるか、なんらかの方法で殺されたりした場合、なにがおこったかを知らないでいるよりは、知ったほうがずっとよい。バカげたことだと思われるかもしれないが、ベルモンテの場合のように不可解な姿の消されかたをすると、いろいろなことを想像するものだ。そして、ベルモンテがどこかのガレージか納屋みたいなところに行ったりとじこめられてしまつて飢え死にしたのではないかなどと考える。わたしはこの若くかわいかったネコを失つてほんとうに気持が動転したが、かわりのネコを飼うことにきめたのは妻のほうだった。

つぎの九月に妻は兄弟の一人がやっている農場で、かわいショウガ色の子ネコが一匹生まれた話をし、わたした

ちがひきとらなければ、その子ネコは安楽死させられるのだといった。こうしてわたしたちは、またショウガ色のネコを飼うことになったが、そのネコは足がとくに短くて、特別優雅だというわけでもなく、またティモシーやベルモンテのように美しい模様がついているわけでもなかった。いふなればそのネコは、ネコの世界の百姓じみたネコだった。わたしがそのネコにビリー・ウイリアムズというやや変わった名前をつけたのも、じつはそのためだった。じっさいその雄ネコは、まさに田舎ものと呼ぶにふさわしいネコだった。元氣にあふれてはいたが、子ネコの時から、なんとも物わかりのろいネコだった。冬じゅう、そのネコはわたしたちに多大の喜びを与えてくれたが、春になって突然、元氣ざかりの命を絶たれた。車にひかれて即死したのだ。

わたしたちの家の外を通っている道は、両側を急な堤にかこまれた狭い道で、道路がどういふものかということを知らないネコにとってその道は死の罾^{わな}だったのだ。どれほど元氣のいい子ネコでも、その場所の危険を知らなければ逃げようがなかったろう。わたしはもっと早くそのことに気づくべきだったが、すくなくともビリー・ウイリアムズは、自分をはねとばしたものがなんだったかさえないまま昇天したことだろう。

わたしはビリーのなきがらを果樹園に埋めた。そしてそれが、すくなくともわたしにとってはネコとの甘い思い出

のさいごとなった。わたしたちは結局、一年の間にネコを二匹失ったのだ。

それから二ヵ月後に、わたしがその地方の居酒屋にいた時、男が一人やってきて、わたしが最近ショウガ色のネコをなくしたことを聞いたといい、新しいネコをほしがっていると言いましたがといった。わたしは礼をいい、できるだけ穏やかに、しかしきっぱりとネコはほしくないといった。だが、たまたまその男は農家の人で、こんなふうに先をつづけた。

「そりゃ残念ですね。じつはわたしのところで子ネコが生まれまして、そのうちの一匹がじつにすばらしいんですよ。なんともかわいいんです」

その男がさらにいったことによれば、彼自身はネコが好きじゃないという。だが、その一匹の子ネコだけは特別で、年の割には体が大きく、今にきつと並はずれたネコになるだろうという。そしてもしわたしがそのショウガ色の子ネコをいらぬというなら、その子ネコは、他の兄弟姉妹の子ネコとともに安楽死させなくてはならないことになるというのだった。

わたしはその男が説明した子ネコの特徴に興味をそそられた。と同時に、わたしは自分が気の弱い男なのだとも思った。それでもわたしは時間をひきのばそうと思い、妻にきいてみなくてはわからないといった。ところがそんなことは妻に聞いてみるまでもなく、わたしにはちゃんとわか

つていたのだ。つまり妻は反対などするはずがなく、やがて並はずれたものになるだろうというそのネコを家で飼うようになることは、わかりきったことだったのだ。

わたしはその夜、居酒屋でその男に会い、日曜日の昼ごろ自転車にバスケットをつけていくからと言った。そしてわたしは自転車で行ってその子ネコをひきとってきた。たしかにそれは生後八週間にしては大きな子ネコだったが、シヨウガ色の雄ネコというよりは、ぼんやりした褐色のしまがはいった砂色のネコだった。だが美しく均整のとれたネコで、わたしたちはそのネコにジョニー・カラキー・オブ・リモー、という風変わりな名前をつけた。もっとも、わたしたちはふだん、短くカラキーとだけ呼び、知らない人たちに、とくにこの子ネコの名前を印象づけたい時にだけ長い名前を言った。

カラキーを飼うようになってほんの二、三週間で、ある夜妻はわたしをびくりさせるようなことを言った。もうすぐシヨウガ色の子ネコがもう一匹家へくることになったというのだ。わたしに小言をいう暇も与えず、妻はジョニー・カラキーに仲間ができるのはとてもいいと思うと言った。子ネコを二匹で遊ばせておけば、一匹だけの子ネコのごきげんとりをするより、手がはぶけていいというのだ。

その新しい子ネコがきたのは八月の末で、生後六、七週間のものだった。わたしは初めからその子ネコがとても気に入って、アンクル・ウィスカース（ひげおじさん）という

名前をつけた。それは競馬ウマの名前をとったもので、一九五九年当時、けっこういい成績をあげていたウマだった。

1

ひげおじさんは家へきた時から、やがてすばらしいネコになるだろうという気がした。当時はまだとても小さなネコだったが、このことはまちがいないように思われた。いわゆる「とんがり型」とでもいうネコで、顔がややとがっていて耳が小さかった。体と足はみごとに均整がとれていたが、はつきりした欠点が一つあった。それはそんなに重大なものではなかったが、尾がいくらかやせて貧弱だったことだ。しかし、子ネコながら体の色の配色は非のうちどころがなかった。金砂色の地色の上に、輝くばかりのオレンジ・ブラウンの豊かな色があふれていた。しまとまだら模様があふんだんにつき、そのしまや模様は、美しい対称形についていた。また毛脚が短かったが、これはわたしの考えでは、いつでも有利な要素とみてよかった。こんなわけで、ひげおじさんは子ネコながら「将来を約束された」ネコという感があった。だがネコというものは子ネコ時代はすべて似たり寄ったりのもので、やたらに元気がよく、いたずら好きだが、独自の個性というものはまだ潜伏しているか、あるいはほとんど発達していない。

それでも、ひげおじさんはやはり特別のネコだった。そしてわたしは、そのネコがやがて独特のネコになることを信じて疑わなかった。子ネコながら特別のネコだったと思うのは楽しいことにちがいないが、今になって思いかえしてみると、はたして、ほんとうにそう思っていたかどうか疑わしいという気もする。ひげおじさんもジョニー・カラキーも、ともにいじわるな気持はなにひとつもちあわせていなかったが、二匹とも針のように鋭い爪をもっていた。そしてかれらがわたしの体を木とみなし、その鋭い爪を使ってわたしの足をよじのぼり、肩にのろうとすると、ただ痛いだけではすまされなかった。また二匹とも、どうしてもやめさせなければならぬくせがあった。それは放置すれば金がかかり、また、なんともたまらないものだった。つまり布張りの椅子の背やカーペット、それに壁紙でさえ爪とぎ用にしてしまうことだった。

わたしの経験では子ネコの場合、もしそういうことをやったらすぐに子ネコの首をつかんで持ちあげ、長々と不快な声の調子でもんくをいうのが一番いい。もしもそれでも子ネコがわかったようなうすをみせなければ、子ネコの顔を吹いてやる。そしてもし、子ネコのほうで反抗してツバを吐きかけてきたら、こちらも負けずにツバを吐きかけてやる。これは歯をしっかり閉じて、その間から息を勢よく吐けばよい。

一九五九年から六〇年にかけての冬にわたしたちはその

二匹の子ネコを手にいれたが、同じくらの年ごろのネコを二匹手にいれられたということは運がよかった。というのは子ネコ一匹だけというのは、その相手をするのにけっこう時間をとられるからだ。子ネコたちはひんばんに眠ったが、眠りと眠りの間にはじつによく遊んだ。生まれつきいくらでもわいてくるらしいエネルギーを発散させ、手足をきたえるために子ネコたちは運動をしなければならぬのだ。

子イヌと同じように二匹の子ネコは戦いのまねごとが好きだった。しかし子ネコたちが家の中にいる時、子ネコたちを喜ばせて、しかもわたしたちが労力をはぶける一番いい方法は、ピンポンの玉をたくさん与えておくことだった。ピンポンの玉というのは軽くてよくはずむ。どんな子ネコでもピンポン玉を追うのは大好きだ。二匹はピンポン玉を追って部屋の中を駆けめぐり、廊下を行ったりきたりして、あぐくのはてにすっかりへたばって体をまるめ、眠ってしまうのだった。そのあと、あなたがたがやらなければならぬことは、ピンポンの玉をさがすことだ。それはたぶん、こっちの家具の下、あっちの家具の下とのぞきこむために、さんざんかがんでみなくてはならないはずだ。そしてその時には、それがなんともわずらわしいものと思われるかもしれないが、とにかくそれはいい運動である。

ひげおじさんとジョニー・カラキーは、目ざめている間、外にしようと屋内にしようと、ほとんどの時間をおた

がいの楽しみについやした。元氣よくはねまわっていたと思うと、段階をかけあがつたりかけおたり、部屋へとびこんだりとびだしたり、廊下をかけぬけたり、休みなく追いかけてこをつづけた。前にも書いたように、ジョニー・カラキーは体が大きかった。それに、ひげおじさんより、すくなくとも二ヵ月は年上だった。だから遊びでもゲームでも、二匹のうちではジョニーのほうがずっとうわてだった。だが、ひげおじさんは、たとえとっ組みあいでは負かされるとしても、ちょっと距離のある争いになると、ひげおじさんのほうが勝った。ひげおじさんは、体がずっと小さかったが、走るのはジョニー・カラキーよりはるかに早かった。そして追いかけてくるジョニーから逃げようとすると、なかなか頭のいいところを見せた。それはひげおじさんがおとなになってからみせた頭のよさをしのばせるようなものだった。ひげおじさんは、いろいろな隠れ場所をつぎつぎと変えつづけた。ジョニー・カラキーはいささか頭がにぶいせいもあつただろうが、たいていいいつも、ひげおじさんのいろいろな隠れ家を調べあるくことになった。しかしその調べる場所は一番目立つところとか、部屋の入口にもっとも近いところとかだった。

ところがひげおじさんは、食堂のテーブルの下に押しこんだ椅子の上のようなところに身をかくす。ジョニーはそつと注意ぶかくはいってくる。それから食器棚のところへそろそろと進んでいき、明らかに興奮しながら頭と首を食

器棚の下へ押しこんでのぞく。そのようすは自分がねらっている獲物は必ずそこにいるはずだという確信に満ちているかのようだ。ひげおじさんはその機をのがさず、ジョニーにとびかかる。しかもジョニーが注意をべつのところへ向けている最中という不利な時にとびつくのだ。そして、ふいうちをくったジョニーが、なんとか身をふりほどくころには、ひげおじさんは階段の上の安全なところへ逃げてしまふ。

こういかわいい戯れは一時間かそこいらつづく。二匹ともじつにおもしろく、いい氣ばらしになるが、時にうんざりして子ネコのやることが神経にさわるようなら、部屋にとじこもつて、子ネコたちをかってに遊ばせておけばいい。それでも子ネコたちはけっこうまく遊べるものだ。頭のいいネコなら忍耐と経験によって、あるていどあなたの世界にはいりこむことができる。あなたがたのがわでも、もしいっしょうけんめいやってみるなら、ネコの世界のごく一部へはいりこむことができる。そしてじっさいに人びとは、ごく子供じみたやりかたで自分がネコの世界にはいりこんだと思っている。だが子ネコの世界というのは、ほとんど入りこむことができないもので、せいぜい傍観者の役をつとめることで満足するほかない。それでも、あなたが不幸にしてユーモアのセンスをまったく欠いている人間でないなら、子ネコのやることを見てじゅうぶん楽しむことができるはずだ。

ジョニー・カラキーとひげおじさんは両方とも急速に育ちつつあった。二匹とも最初の冬を大いに楽しみ、そろそろ二、三の点で子ネコ時代をぬけだして、おとなのネコの特徴を身につけようとしており、その未来はバラ色に輝いているように思われた。カラキーは体が大きく、すでに美しく均整のとれたネコになっていた。ひげおじさんは体の小さい割にはきわだった個性をみせ、知能のていどは目をみはらせるものがあつた。

一九六〇年三月の初めに、仕事で週末、家をあけた。そして月曜に事務所へ帰ってみると、またネコを一匹なくしたという悲報をきかされた。ジョニー・カラキーが道を横切っていて車にはねられ、即死したというのだ。

妻はわたしにそのあと始末をさせることにした。そこでわたしは夕方家へ帰ると、懐中電燈をもって納屋にはいっていった。あの元気のよかった子ネコが、動かぬ死骸になって棚の上ののつていた。口のまわりに血がこびりついているほかは、生きていた時とおなじように上品にみえた。そんなに小さいうちに早くも命を絶たれてしまったことは、なんとも哀れだった。この世の命にとって、死よりほかにゆきつくところはない。わたしとしても、今はジョニーを埋めてやるほか、どうしようもなかった。そこでわたしは、あくる朝早く起き、果樹園に穴を掘ってその中にジョニーのなきがらを横たえた。ジョニーの死骸に土をかけながら、わたしは無言の誓いをした。つまりベルモンテ

のように迷いネコが現われればともかく、そうでないかぎり、この家ではもう絶対にネコを飼うまいということだった。家のそばの、両側を堤にかこまれた小道は、子ネコにとって死の畏_{おそ}いのだ。

ネコが仲間_{仲間}のネコがいなくなったことをどのていどさびしがるものかを見わけるのは容易でない。ひげおじさんとジョニー・カラキーは数ヶ月間、おたがいによばらしい仲間としてすごした。それでも、こういう場合にネコが悲しみを覚えるものかどうか疑わしい。というのは、かれらには消え失_えせた仲間になにがおこったのかを理解することはできないと思われるからだ。だが、かれらが数日間か、一、二週間、仲間がいなくなつて淋しがることは事実で、これは疑問の余地がない。ひげおじさんは、まちがいなく、とまどいと欲求不満の両方についてさまざまの徴候をみせた。数日間、ひげおじさんは夜、家のまわりをめぐり歩き、あきらかにジョニーと遊ぼうとさがしまわるのだが、長い間さがしていないと、さいごに帰つてきて暖炉の前にしゃがみこむ。そのようすは、いかにもやるせないように見えた。

ビリー・ウイリアムズが子ネコだったころ、わたしはピンボンの玉を二つ買って、ネコといっしょに長い冬の夜を楽しんだ。子ネコといっしょに階段の下に腰をおろし、ピンボンの玉を階段の上へ投げあげるのである。すると子ネコはすごい勢いで階段をかけあがっていく。ところが子ネ